2018

J・A・C

（第 43 号）

平成 30 年 6 月発行

日本山岳会千葉支部

発 行 者　三木雄三
編 集 者　吉野 聰
事 務 局　〒283-0116
山武郡九十九里町西野672-2
三木雄三方
Ｔ Ｅ Ｌ　0475-76-9467
E-Mail 支部だより参照

（表紙の絵）「知床連山」
水彩画　小菅一弘　作　（敬称略）

30 年度通常総会

平成 29 年度事業・決算報告、平成 30 年度事業計画・予算・新役員　満場一致で承認

平成 30 年度千葉支部通常総会が 5 月 12 日（土）、千葉市文化センターにて行われた。

平成 29 年度事業、決算報告と平成 30 年度事業、予算および新役員人事について審議され、原案はすべて満場一致で承認可決された。

総会には会員 32 名と会友 10 名が参加、会員からの委任状出席は 35 名だった。

総会終了後は、松田宏也会員による記念講演があり、36 年前のミニヤコンカでの奇跡の生還と、その後のきびしいリハビリを経て再起までが語られた。

また午後からは恒例の「美弥和」での懇親会が開かれ、34 名が参加してこれから登る山の話などで盛り上がった。（記・三田博）

≪参加者≫

髙橋正彦、節田重節、吉永英明、塩澤厚、小疇尚、山田和人、新村貞男、大澤雅彦、山口文嗣、松田宏也、石岡慎介、佐藤明夫、柳下忠義、岩尾富士夫、諏訪吉春、三木雄三、山﨑完治、谷内剛、安間繁樹、上村紀子、湯下正子、山本哲夫、廿楽敦夫、三田博、山田紀夫、三田芳江、香高真奈美、能美勝博、羽藤美代子、宮崎美智代、杉本正夫、小林義亮、三品京子、齋藤米造、梶田義弘、塩塚生ニ、宇津木仁典、竹園清孝、川島辰雄、廣村恵美子、平出正美、鎌谷繁、神山良雄、竹内進

記念講演　「いのちの山」　講師　松田宏也会員

「いのちの山」と題して行われた松田宏也会員の講演は、同志社大学の山岳同好会で山登りを始め、アラスカ遠征でマッキンリーを間近に見たことで、いつか 8,000m峰に挑戦しようと思ったことなどが語られた。

1982 年中国四川省ミニヤコンカ（7,556m）の遭難では、アタック当日に快晴だった天候が頂上直下で、あっという間に吹雪になり数日間のビバークを余儀なくされる。登頂を諦めるが、下山中にルートを見失い、同行者の死と 19 日間さまよった後の奇跡的な生還に参加者は真剣に耳を傾けた。その時、松田会員は「もっと高い山にのぼるまで死ねない」と思い続けたそうだ。また当時の日中友好ムードの中、中国人による献身的な救助活動や治療があったことが話された。後半は、リハビリを経て冬の北海道・斜里岳に挑んだ当時のテレビ番組が上映された。若かりし頃の松田会員が、義足で必死に雪山を登る様子が映し出された。

松田さん発見場所に建つ「松田小道記念碑」

1995 年には小西政継氏らと念願の 8,000m峰シシャパンマへ遠征、7,430mの最終キャンプまで登る。登頂こそ果たせなかったが「ここまで来れた」と感慨深いものがあったという。夢を持ち続けた山男の強さに会場の参加者も感動した様子で、講演が終わると松田会員には大きな拍手が送られた。（記・三田博）

松田宏也（まつだひろなり）さんのプロフィール

1955 年　大分県佐伯市に生まれる
1978 年　同志社大学経済学部卒業
　在学中から登山始める
　アラスカ・ヘイズ峰（4,150m）遠征
1982 年　中国四川省ミニヤコンカ峰（7,556m）遠征・遭難
1983 年　500 日闘病生活の後社会復帰
1984 年　両足義足にて登山活動再開
1986 年　冬の富士山（3,776m）単独登頂
1987 年　冬の北海道知床斜里山（1,545m）登頂
　日本各地の山を登る一方、スキー始める
1995 年　8～9 月チベット・シシャパンマ峰（8,027m）遠征
　7,430mのファイナルキャンプに達する
（著書）「ミニヤコンカ奇跡の生還」「足よ手よ僕はまた登る」（山と渓谷社）外

シシャパンマ峰のベースキャンプにて

椿まつりの伊豆大島で三原山に登る

３月４日（日）～５日（月）　　梶田　義弘

今回の目的地は、東京から 120 ㌔離れた伊豆大島の三原山（758 ㍍）。雄大な活火山を観光して温泉付きのホテルに１泊、さらに開催中の椿まつりも楽しんで 1 万 8000 円というお値打ち料金の〝山行〟に 16 人が参加した。

天気は快晴。午前 9 時 25 分、館山港を出港した高速ジェット船は揺れもほとんどなく、50 分で大島の岡田港に到着。港では、絣の着物に前垂れ姿のあんこが観光客をお出迎え。あんこは島の言葉で「お姉さん」だそうだが、年齢は不詳。

午前 11 時半、御神火茶屋から出発。カルデラ内の表砂漠コースを歩き、山頂を目指す。道は平たんだが、溶岩やスコリアが細かく砕けた砂利は、歩きにくい。リーダーの三田さんによると、国土地理院の地図で「砂漠」と書かれているのは伊豆大島だけという。ごつごつした溶岩と低い草が続く風景は、映画のワンシーンのよう。正午すぎ、岩陰で風をよけながら昼食。再び歩き始めると、神社の鳥居が見えてきて、そこから急坂を２０分

も登ればもう山頂。ここから噴火口をぐるりと一周する「お鉢めぐり」が三原山登山のハイライトだ。最初はガスが広がり、周囲がよく見えなかったが、やがて晴れると、巨大な火口が大迫力で迫ってくる。外側を見れば、黒い砂漠、青い海と、カルデラの雄大なパノラマが目の前に広がる。剣が峰付近では、這いつくばっていても体ごと吹き飛ばされそうな強風だったが、これも滅多にできない経験で楽しかった。唯一の心残りは、島の人口（約 8000 人）の 2 倍近くいるといわれる野生のキョンを見られなかったこと。

翌日は裏砂漠のテキサスコースを歩き、約２時間で大島公園に到着。公園では 7、8 人のあんこが舞台で手踊りを披露したり、一緒に記念写真に納まったりしてくれた。「私たち、戦後生まれよ」と笑っていたあんこさんはとても可愛かった。三田さんは神津島の天上山、八丈島の八丈富士などの山行企画も考えているという。今後の島巡りに乞うご期待。

参加者：三田博（L）、三木雄三、梶田義弘、湯下正子、上村紀子、三田芳江、吉永英明、安間繁樹、能美勝博、渡邉信一、山口文嗣、山﨑完治、鎌谷繁、塩塚生二、新井好夫、竹園清孝

鍋割山＆塔ノ岳

平成 30 年 3 月 10 日（土）　山田　紀夫

天気予報では曇りから午後晴れ。しかし、鍋割山と塔ノ岳も全山雲に覆われ霧の中だった。登山時間 7 時間 50 分（9 時 20 分～17 時 10 分）

小田急線、渋沢駅で合流し、タクシーで登山口の大倉へ。9 時 20 分、標高 290mの大倉を出発。小雨の中、西山林道を約 1.5 時間、行程を考え急ぐ。途中滝などもあるが見向きもしない。二俣分岐に差し掛かり 3 方向に分岐しているが、迷わず鍋割山へ。

登山口、鍋割山荘のペットボトル 1 - 4 リットルを全員が持った。二俣の標高 527m、鍋割山 1,272m、標高差約 750mだ。霧と樹林の織り成す幻想的な光景を楽しみ、後沢乗越に。ここから急登が 1 時間半続く。半年間、本格的な登山をしていなかった私には厳しかった。会員が見えなくなる。全山雲が掛かり、霧で何も見えない。歩いていても寒かった。予定通り 12 時 55 分、鍋割山荘に着くと名物の本格的な鍋焼きうどんを頼んでいてくれた。ペットボトルを小屋に降し、熱々の鍋焼きうどんで冷えた体を温め一息つくことができた。

参加者　山本哲夫、三田博、山田紀夫、宮崎美智代

美味しかった。13 時 24 分、出発。鍋割山稜次の目的地、塔ノ岳までは、標高差 210m。何度かアップダウン、小丸尾根からの分岐、大倉尾根で霧氷に覆われ真っ白な樹々に全員カメラを向けた。塔ノ岳は目の前だった。残った力を振り絞り登りきると、塔ノ岳の大きな表示塔、独特の塔ノ岳山荘がドーンと霧の中に見えた。14 時 43 分。山頂で集合写真を撮り、しばらく山頂を楽しんだ。15 時 00 分、一気に大倉尾根 8.5Kを下る。下りの大部分は木道でステップがとりづらく歩きにくい。リーダー山本さんのペースに引き込まれ、4 人は途中ほぼ休憩なく一気に 2 時間で下った。途中、何組もの下山者を追い抜く。追い抜くたびにさらに元気が増し下山スピードは最後まで衰えずに下りきった。

17 時 10 分、大倉バス停に着く。途中の山道は、雪解けのためどろどろの場所が多く、靴が汚れた。洗い場で丁寧に汚れを落し 17 時 35 分発のバスに乗車。渋沢駅前で反省会。やっと暖かい所で休息できた。

高水三山で読図練習

3 月 31 日（土）　三田　博

山登りをするのに必ず必要になるのが地図とコンパスだ。山岳雑誌でも年に一度は「地図読み」の特集をしているし、講習会も盛況だという。それなら、千葉支部でも初級者向けにやってみようということで、奥多摩入門の山・高水三山を歩いてみた。コースは青梅線の軍畑駅に集合して、高水山、岩茸石山、惣岳山、御嶽駅まで縦走した。

講師役の山口副支部長に登山道のポイントごとにクイズ形式の課題を作ってもらい、地形の特徴や目印になるものを地図と照らし合わせながら歩いた。尾根を挟んで広葉樹と針葉樹になっている場所など植生が現在地を特定する目印になることが、地図を見ているとよく分かる。尾根に上がる、トラバースする、こういうことが地図ではどう表されているか勉強した。

道迷いしないために大事なのは、現在地はどこなのか把握するということ。そのためには、地図を見ながら歩く習慣を身に着けることが必要だ。迷ってから地図を出しても、現在地が分からないのであれば手遅れだ。

今回の講習では、ポイントごと次のコンパスの 3 アクションを繰り返しおこなった。

1、地図上でコンパスの長辺を現在地と行きたい場所を結ぶ（ワン）
2、回転盤矢印と磁北線が平行になるように回転盤を回す（ツー）
3、地図からコンパスをはなし、赤針と回転盤矢印を重ねた時にコンパスの進行矢が指しているのが目的の方向（スリー）

山座同定はその手順を逆にやればよい。昼食をとった岩茸石山は見晴らしがよいので地図とコンパスを使い、みんなで山座同定をしてみた。北西の方角に棒ノ折山、武甲山などが見えた。下りでは、登山道が送電線の下を 3 回くぐるようになっており、尾根上には鉄塔があるので目印になることなど理解できたと思う。コンパスの操作も繰り返しやらないと忘れてしまう。参加者はこれから 25,000 地形図とコンパスを使って山歩きして欲しい。

今回、奥多摩の山を隅々まで知る東京多摩支部の宮崎紘一さん（元 JAC 副会長）にアドバイスをしてもらいながら一緒に歩いた。また帰りの反省会では多摩支部の登山教室の話なども聞けてとても有益だった。

参加者：三田博（L）、山口文嗣、吉永英明、湯下正子、羽藤美代子、香高真奈美、鎌谷茂、塩塚生二、梶田義弘、吉田望、国宗文、三品京子、宇津木仁典、齋藤米造、宮崎紘一

菜の花見ながら江戸川ウォーク

4 月 1 日（日）　　香高　真奈美

その名も「運河」駅（東武アーバンパークライン）から春の利根川運河歩きはスタートした。土手のさくらは満開。その一角に「ムルデル」の碑。

運河の国オランダの技術者ムルデルは明治 12 年に来日し日本各地で技術指導をした。

そして明治 19 年からこの大工事を監督し延べ 220 万人の働きにより 23 年に通船。東京～小名木川～江戸川～利根運河～利根川～銚子の 144 キロが船で 18 時間で結ばれたそうだ。私は掘削された土手や水の流れを見ながら明治の賑わいに思いを馳せる。船は銚子で醤油・魚を、佐原で米を、流山で白みりんを積み東京へ。戻りは東京の物資とともに文化も運んだのであった。しかしその後鉄道の開通や洪水の影響などにより長距離航路は急速に衰退し、運河の最盛期は明治 43 年頃までの 20 年程であった。

さて、江戸川の土手に入った我らの横をたくさんのサイクリストたちが往来する。咲き誇る一面の菜の花が本当にきれいだった。

途中、かっての新撰組の士たちが渡ったと言われる「丹後の渡し」やいくつかの渡し跡があったが、現在残っているのは「矢切の渡し」だけだそうだ。

参加の小疇先生が、集落の形を見てかっての川の流れを解説してくださる！また、平たんな場所に盛り上がった小山の上に鎮座する赤城神社については・・・・『かっての洪水の際、群馬県の赤城山の山体の一部が流れてきてここに流れ着いたものという伝承がある。「流山」という地名もこれに由来する（諸説あり）』との解説。まるで「ブラコアゼ❤」興味がわき楽しいです。

お昼には杉本さんの案内で流山市クリーンセンター内談話室へ。快適な部屋で皆お弁当と楽しい談話タイムでした。

その後三郷駅に出て解散となった。何名かは残って駅前の店にてお話の続き！

杉本さん、小疇先生有難うございました。

今後も「ウオーキング企画」（3 回に分けて東京湾から印旛沼まで歩く。第 1 回は 2018 年 11 月頃）の予定があるそうです。

皆様、ぜひご参加を！

参加者　：杉本正夫　小疇尚　節田重節　節田洋子　高橋琢子　舩木元　三木雄三
吉田望　香高真奈美

花の南高尾山稜

4 月 8 日（日）　　廿楽　敦夫

高尾山（599m）は、ミシュランの観光ガイドでの三ツ星の効果もあって、いまや年間３００万人の国内外の登山者･観光客が訪れる世界一登山者の多い山となった。その高尾山と谷を隔てて、町田市の最高峰草戸山（364m）から最高峰の大洞山（536m）を経て大垂水峠まで東西に連なっているのが南高尾山稜だ。

高尾山口駅を 9 時 15 分に出発。約 1 時間半かけて草戸峠まで登ると、高尾山の全貌が目に入る。ここから先は、ずっと右手に高尾山が見え隠れしながら歩いていくことになる。その先の草戸山では、都心から横浜方面まで眺められる。11 時 40 分に鬱蒼とした三沢峠に到着し、昼食を取る。ここから大洞山にかけては、上り下りを繰り返しながら、心地良い雑木林の道を進んでいく。

ウワミズザクラ

何度か、ウワミズザクラなどの満開の桜に出会う。また、高尾山は日本一植物の種類が多いと言われるだけあって、ここ南高尾でも、アオイスミレ、エイザンスミレ、ジュウニヒトエ、チゴユリ、ヤマブキソウ、ヒトリシズカなど数多くの花々が咲き乱れる。静御前が一人で舞っている様子になぞらえた「ヒトリシズカ」は、実に可憐だ。何というロマンチックな名前だろう。

「春来たりて草自ずから生ず。」4 月上旬のこの時期の山では、草花が一斉に萌え出ずる姿に出会うことができる。都会の人工的な世界を逃れて、大自然から元気をもらう。

途中、見晴台からは、津久井湖を眼下に、丹沢山塊の山並みが眺められ、水と山と空のコントラストが絶妙だ。残念ながら富士山の全貌は見えなかったものの、富士の雪の斜面を見つけて、なぜかホッとする。14 時 20 分に大洞山に到着。樹の間から高尾山を眺めつつ、美しい花の群落に見とれた。

「避寒、避暑という言葉がある以上、避衆ということもいえるであろう。」半世紀前に登山家の藤島敏男は、「避衆登山」と称して、深田久弥、望月達夫らの山仲間と静かな山行を楽しんでいた。世界一登山者の多い高尾山の真向かいにありながら、低きがゆえに目立たぬ南高尾山稜は、変化に富み、静かな山旅を満喫できる山だった。

大垂水峠まで下ってから、バスで高尾山口駅へ向かい、高尾駅のそば屋での反省会にて一日を終えた。

参加者：髙橋正彦（L）、高橋琢子（SL）、杉本正夫、神山良雄、鈴木操、吉田明子、渡邉信一、渡邉すみ子、廿楽敦夫、工藤まり子、羽藤美代子、吉田望、中村なを子

西 表 島 発 見 の 旅

4 月 12 日（木）～17 日（火）　　山田紀夫

1965 年イリオモテヤマネコが発見されて以来、西表島の自然の中で直接観察という手法で研究を続けている千葉支部会員の安間繁樹さんの案内のもと、千葉支部の 12 人が西表島発見の旅に出発した。

旅の初めに「古見岳の由来」　安間繁樹

「古見岳」（469.5m）は、西表島の最高峰というだけの存在ではありません。まず、皆さんは西表を「イリオモテ」と読むことが出来ましたか。イリは「入り」、太陽が沈む方向です。ちなみに東はアガリ（アーリ）です。石垣島の最高峰（ウムトウダギ→大本岳・於茂登岳）に対し、古見岳は西のウムトウ岳と言われ、イリウムトウ→イリオモテという名がついたと書物にあります。

1914 年、入表島（現西表島）全体が、初めて同じ竹富村（現竹富町）の一部となりました。それまでは東部の古見村と南風見村が石垣間切または宮良間切に属した時代があり、西部の入表村は大浜間切に属していました。間切とは現在の村に相当します。遡ること 15 世紀には、東部を姑弥（コミ）島、西部を所乃（ソネ）島と呼んでいました。一つの島なのに、呼び名が違っていたわけです。姑弥は現「古見」、所乃は現「祖納」です。

現在の古見は 1954 年に再建された集落です。旧の古見は、西表島でもっとも古い集落だったと言われ、大昔、八重山の中心は竹富島や石垣島ではなく、古見であったという説もあります。

カンピレーの滝

さて、西表島には、集落名や隣接した島の名前がついた山がたくさんあります。コミ岳（古見）、ソナイ岳（祖納）、ハテルマ森（波照間島）、テドウ山（竹富島）、ハトマ森（鳩間島）などです。これは琉球王府時代の 1739 年に施行された杣山制度によるもので、その地域での森林の利用を認めた入会権のなごりです。

このように、古見岳は西表島の歴史を背負ってきた山なのです。

2 日目「島の滝と宇多良炭鉱史跡」　高橋琢子

西表島発見の旅は、浦内川のジャングルクルーズから始まった。

マングローブの生い茂る川を 30 分ほど遡り、亜熱帯植物の原生林へ。アダン、ガジュマル、サキシマスオウなど豊かで伸び伸びと育った木々の中をワクワクした気持ちで歩き、マリュドゥ滝とカンピレー滝を目指した。

展望台から見たマリュドゥ滝は水量が多く、深緑色をした滝つぼに落ちる様は神秘的。滝からの風が心地良かった。更に上流へ。広いナメ床のあるカンピレーの滝では、咲き残っていた西表島や台湾に分布する薄紫色のセイシカ（聖紫花）とサキシマ（先島）ツツジの花に癒された。

河口に戻り、史跡宇多良炭鉱所へ向かった。不気味にガジュマルが絡まった大きなレンガの橋脚が、目に飛び込んできた。最盛期には数百人が生活していたという炭鉱だが、マラリアで多くの人が亡くなったという。残った橋脚に沖縄の歴史を見る思いがした。

3 日目「古見岳登山」　渡邉信一

登山口から相良川に向かって下り、相良川を登山靴を脱ぎ最初の渡渉。辺りの亜熱帯林は照葉樹林（オキナワウラジロガシやオオタニワタリ）が多かった。水深 20cm 位の細かな礫の沢の渡渉を何度も繰り返す。13 回目の渡渉が終わり、

ここから古見岳の尾根道は本格的な急登になった。古見岳の中腹の登山道の両側はツルアダンのジャングルだった。最後の水場(滝)を過ぎて一服する。ここから山頂近くまではかなりの急登になる。山頂まではリュウキュウチクを掻き分けての急登でシンドかった。

古見岳（470m）頂上（コースタイムより 1 時間以上遅れ）　頂上はリュウキュウチクの藪に囲まれて視界無し。三角点広場で昼食。

下山は由珍川を下るルートで、苔むした岩石の道を「由珍の滝」まで慎重に下る。登山道には道標の赤布が沢山付いていた。由珍川東本流には 80mに及ぶナメ床が２ヶ所もあり、登山靴ではスリップしやすい場所なのでザイルを設定して下る。転倒者が出たもののどうにか下山、宿に到着。

4 日目「西表島観光」　三田芳江

今日は安間さんのガイドで島内観光の日。西表島で道路が通っている西端の白浜に向かう。東経 123 度 45 分 6,789 秒の子午線が通っている場所に作られた「子午線モニュメント」に立ち寄り、白浜港に到着。対岸の船でしか行かれない船浮集落、かつての石炭の島の悲話を伺う。

白浜から時計回りに東部地区に向かう途中、見通しの良い海中道路の駐車場から沖縄県最大の「ピナイサーラの滝」が山側に見える。西表野生生物保護センターへ。ここはイリオモテヤマネコの保護活動の拠点。貴重な西表島の野生生物や自然環境について知ることができた。

大原港方面の満八食堂で昼食。南風見田の浜は 1965 年に大原中学校の生徒がイリオモテヤマネコを発見、保護した場所。記念のモニュメントの前で記念撮影。《今日 4 月 15 日がちょうどイリオモテヤマネコの日だった》

干潮で念願の「もずく」採りが出来た。大見謝ロードパークでマングローブの遊歩道を歩き、海の景色を満喫し宿へと向かった。

5 日目「於茂登岳登山」　山崎完治

沖縄県の最高峰「於茂登岳」(526 メートル)に登った。石垣島のほぼ中央にそびえ、亜熱帯のジャングルの山である。

丸木橋を渡り、パイナップルに似た実をつけるアダン、サトイモに似たクワズイモの大きな葉をかき分け登る。幹に直接果実をつけるギランイヌビワという不思議な樹木に出会った。広葉樹の密林で蒸し暑さの中にも、開拓の記念碑や祠などがあり、自然の恵に感謝する島民の生活を感じる。尾根筋に出ると肌に心地よい涼しい風が通り抜ける。急登を詰めると、ササの背が低くなりレーダードームや電波塔を過ぎ、視界が開けた山頂に出た。山頂には三角点が置かれている。足元には青いサンゴ礁の川平湾、石垣市内の眺望、千葉の山で見る景色とは比較できない絶景で感動した。途中滝を見学したりしながら、予定の午後 1 時 30 分に下山した。

参加者　　山田紀夫（L）、安間繁樹、上村紀子、小澤けい子、齋藤米造、高橋琢子、三田博、三田芳江、山口文嗣、山崎完治、山本哲夫、渡辺信一、小川和敏

平成 29 年度　第 11 回四支部合同懇談会（栃木支部）

2 月 17 日（土）～18 日（日）　齋藤米造　　吉田明子

第 11 回北関東ブロック四支部合同懇談会は栃木支部の主催により那須塩原市塩原公民館で行われました。全体で 35 名、千葉支部からは 10 名の参加となりました。

懇談会は栃木支部長の挨拶のあと各支部の活動報告があり、三木支部長からは初めに、来年は千葉支部主催で内浦山県民の森で四支部合同懇談会が開催されるとの紹介があり、多数の参加を呼びかけました。また昨年は 10 周年式典を挙行し、あらためて「原点に帰ろう」「千葉の山を知ろう」という千葉支部の姿勢をアピールしました。郡界尾根踏査の取り組みについても説明し、間もなく終了する旨報告されました。

引き続き、動物カメラマンの横田博氏を講師に「ツキノワグマ未知の姿」と題する講演がありました。今市市在住の 70 歳。銅山で荒廃した足尾の山で、30 年間ツキノワグマの生態をカメラに収めたドキュメントＮＨＫの「ワイルドライフ」を覧になった方も多いことと思います。熊仙人とも呼ばれるその風貌と人となりに引き付けられました。『人は、多少は動物に気を遣ってもらいたい』という言葉が印象的でした。

この後塩原温泉の老舗旅館「明賀屋本館」に移動し、懇親会が開かれました。横田氏を交え、全員が自己紹介をして懇親を深めました。

18 日（日）は《登山班》と《観光班》に分かれて行動しました。

《登山班》8：00 旅館を出発。栃木百名山の新湯富士（1,184m）を目指すも昨日からの 20 センチの新雪で道路が大渋滞。このため登山開始が大幅に遅れ 10：15 出発。膝上まで潜る雪のなか、地元 栃木支部の方がワカンを付けてラッセル。行動時間を 11：30 までと制限していたので、頂上手前で時間切れのため下山しました。短時間でしたが、雪山の気分を味わえた山行でした。　（齋藤米造）

《観光班》登山班より 1 時間遅いスタートでしたので、夜は怖くて入れなかった河原の露天風呂を一人で楽しみました。

観光班の目的地は「木の葉化石園」。古塩原湖に積み重なった地層から発見される植物や昆虫の化石で有名な施設です。玄関前の地層の前で、職員の方が雪の中を解説してくださいました。30 万年前のイヌブナやクリのイガ、クモやカエルの化石を見ながら、今とほとんど変わっていない植生に驚きました。

たくさんの出会いと楽しさが詰まった、あっと言う間の２日間でした。

参加者：《登山班》吉永英明、三木雄三、山口文嗣、三田　博、三田芳江、齋藤米造、
《観光班》柳下忠義、神山良雄、吉田明子、鈴木　操

郡界尾根踏査の報告

第 18 回平成 29 年 12 月 16 日（土）

コース：内浦山県民の森 9：35→
12：45 勝浦ダム→13：40 県民の森

山口文嗣

内浦山県民の森から麻綿原に向かう林道（林道奥谷線）が郡界尾根に突き当たる所から歩き始める。高低差はあまりないが、ヤブがうるさく意外に時間がかかり、やっと勝浦ダムに到着。この先も時間がかかりそうなので、ここから県民の森事務所に下る。

なお、今回踏査の起点・終点である内浦山県民の森に多大なご協力をいただきました。感謝いたします。

参加者：山口文嗣、岩尾富士夫、小澤けい子、松田宏也、高橋正彦、鈴木操、吉田明子、柳川しげよ、平出正美、三品京子、廣村恵美子

内浦山県民の森から郡界尾根へ向かう

第 19 回平成 30 年 1 月 28 日（日）

コース：勝浦ダム 9：30→11：20 太陽光発電施設上→13：20 県道 82 号台宿→14：35 行川アイランド駅

山口文嗣

前回終了点の勝浦ダムから急な斜面をロープを使って登り、郡界尾根上に出る。比較的歩きやすい道を南下して行くと、突然西側斜面下に、大規模な太陽光発電施設が現れる。尾根の一段下に古い林道跡が郡界沿いに続いているので、ロープを使って道に降りる。そのまま進むと自然に興津側の県道 82 号の台宿集落に出る。そのまま南下し、時間があったので、おせんころがしの断崖を見てから行川アイランド駅に向かう。

参加者：山口文嗣、岩尾富士夫、小澤けい子、松田宏也、高橋正彦、鈴木操、齋藤米造、三田博、三田芳江、山田紀夫

参 加 者　10 名 で

入　会　の　ご　挨　拶

吉田（よしだ）　望（のぞみ）

30 年 4 月から、千葉支部に会友として入会させていただきました、国立市在住の吉田望と申します。すでに、千葉支部の山行に何回か参加させていただき、また一木会のお集まりにもお声をかけていただきましたので、何人かの方とはお目にかかっておりますが、改めて、入会のご挨拶をさせていただきます。

なぜ、東京都の国立市に住んでいるのに、「千葉支部に？」と不思議に思われるかもしれません。ことの発端は、昨年の春に、香高さんと久しぶりに再会した時に、多摩の山に時々遠足に来ているので、ご一緒にいかがとのお誘いをいただいたことでした。私の住まいは、中央線の国立ですので、高尾までは目と鼻の先です。今まで、身近な山にはほとんど行ったことがありませんでしたので、このお誘いは大歓迎でした。香高さんとは、全日空で働いていた時の、先輩後輩の間柄ですが、こんな成り行きになるとは思ってもいませんでした。

その後、小疇先生の原稿が掲載された会報を拝見しました。小疇先生のことは、弟さんが、国立で文房具店をされていたので、お名前は存じていました。また、小疇先生と私の夫は以前、一緒にヒマラヤに調査に行っていたそうです。本当にご縁というのは不思議なものです。見えない糸で小疇先生が、私を千葉支部に引き寄せてくれたのでしょうか。

これから、千葉支部の皆さんとご一緒に、感動を共有できることを楽しみにしております。また、山歩きを通して、澄んだ空気に癒され、季節折々の自然に触れ、気分がリフレッシュできればと思っております。

山歩きは初心者ですので、ご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、温かく見守っていただければ幸いです。何卒、よろしくお願い致します。

お　知　ら　せ

●会員の動向

≪入会≫

会員　　S.K さん　千葉市　（16285）

準会員　H.C さん　　船橋市　（A0100）

準会員　N.A さん　　東京都新宿区（A0117）

会友　　Y.N さん　　東京都国立市

≪退会≫

K,J さん（15978）、N.J さん（12903）、N.S さん（11974）

S.K さん（会友）、H.T さん（会友）、A.C さん（会友）、K,A さん（会友）

●会員の現況：平成 30 年 4 月 1 日現在の会員数は 94 名（内、準会員 2 名）　会友 45 名

《お願い》　連絡先の住所・電話・アドレスなどが変わった場合は下記までご連絡ください。

事務局長・三田博　　支部だより参照

●千葉支部　平成 30 年度役員の分担

支部長　三木雄三

副支部長　山口文嗣、**松田宏也**

顧問　　吉永英明

監事　　塩澤厚、髙橋正彦

事務局長　三田博

会計　　**三品京子**

太字　新任

◎委員会

総務委員会　三田博、三品京子（協力委員・三田芳江、廿楽敦夫）

山行委員会　山本哲夫、山口文嗣、三田博、松田宏也、山田紀夫（協力委員・上村紀子、杉本正夫）

自然保護委員会　鈴木美代、安間繁樹

公益事業委員会　山田紀夫、香高真奈美、能美勝博、湯下正子、山崎完治

広報委員会　吉野聰、山本哲夫

●登山計画書の提出について

日本山岳会では、会員の個人山行についても登山計画書を提出することとしているところです。

千葉支部では、そのことを踏まえて受付窓口を設けました。

≪メール受付窓口　支部だより参照≫

受け付けた計画書は、支部長・副支部長・山行委員長および事務局で情報を共有いたします。同時に本部遭難対策委員会へ送ります。計画書の書式については、特に決まっておりませんが遭対委員会の書式を参考にして下さい。http://jac.or.jp/kaiin/syosiki.html

●ビールパーティーは８月 11 日（土）

８月 11 日は「山の日」ですが、千葉の山は暑くて登れそうもないなあ、ということで冷たいジョッキ片手に山の話で盛り上がりましょう！

日　時　　８月 11 日（土）　午後６時から
場　所　　サッポロビール園（千葉ビール園）
　　船橋市高瀬町２　サッポロビール千葉工場内
参加費　　ジンギスカンと飲み放題 90 分。5,500 円
定　員　　25 名
幹　事　　香高真奈美　080-1107-0490
締め切り　７月 31 日まで

●郡界尾根フィナーレ山行計画

郡界尾根踏査もあと１回でゴールの太平洋岸おせんころがし付近に到達できる見込みになりました。
下記要領で、郡界尾根フィナーレ山行と忘年山行を実施します。
半年も先の予定なので皆さんまだスケジュールが確定しないと思いますが、
宿泊場所（内浦山県民の森）の予約確保のため参加意思のある方は早めにご連絡ください。
あくまでも宿泊者の概数把握のためなので､最終の申込み締切日は11月末頃に改めて設定いたします。

12 月８日（土）郡界尾根踏査　内浦山県民の森
12 月９日（日）忘年山行　粟又の滝～小沢又の滝

連絡先
山口文嗣　支部だより参照

●“ネパール・トレッキング”計画（予告）

会員諸兄よりご希望の多かった“ネパール・トレッキング”　を来年 3 月上旬～中旬、10 日間の日程で計画しています。

ルートはカトマンズ～ルクラ～ナムチェ・バザールで、エベレスト、ローツェ、アマダブラム、タムセルクといった 7,000～8,000 メートル峰が望める最高高度約 3,900 メートルまでの往復６日間のトレッキングです。

費用は節約旅行に徹し、総額 20～21 万円を見込んでいます。

詳細はフライト・スケジュールが判明する次号発表。ご興味ある方は、
担当の吉永（℡043-221-0734、090-5192-8793）までお問い合わせください。

＊注　次号スケジュール発表から参加申し込み締め切りまで期間が短いことが予想されます。
（入国手続き等の関係で、申込締切は 10 月中旬の見込）

役　員　会　の　報　告

2月報告　　2月20日（火）　市川アイリンク

出席者　坂上、鈴木、三木、三田、山口、山田、山本、湯下、吉野　9名

1. ４支部懇談会（2.17～18）報告
2. 山行報告（(笹尾根、郡界尾根、箱根湯坂支路、浦安散歩）
3. 山行予定（大島三原山、鍋割・塔ノ岳、花嫁街道、高水三山、江戸川ウオーク、西表島）
4. 30年度山行（６月妙義山、７月越後駒、全国支部懇等）
5. 総会（５．１２）議案、入会申込書改訂　等

3月報告　　3月20日（火）　市川アイリンク

出席者　上村、坂上、髙橋（正）、三田、山口、山田、山本、湯下、吉野　9名

1. ３０年度総会（役員改選、議案書等）
2. 山行報告（郡界尾根、大島三原山、鍋割・搭ノ岳）
3. 山行予定（高水三山、江戸川ウオーク、草戸山、西表島　等）
4. 30年度山行（６月妙義山、７月越後駒、全国支部懇、10月～東京湾から印旛沼）
5. 晴香園山行との関わりについて　等

4月報告　　4月24日（火）　市川アイリンク

出席者　甘楽、上村、杉本、髙橋（正）、松田、三木、三品、三田、安間、山口、山田、山本、湯下、吉野　　14名

1. 支部総会（新役員候補者紹介、総会役割分担）
2. 山行報告（高水三山、江戸川ウオーク、草戸山、西表島）
3. 山行予定（大岳山、裏妙義、紫陽花鑑賞ウオーク、越後駒、全国支部懇、唐沢山）
4. 入退会報告（準会員2名、退会会員2、会友2）　等

支部財政について、繰越金40万あるが、単年度収支がマイナスの現状。財政の健全化を検討すべきとの指摘有。

編集後記

千葉総会が去る5月12日（土）に開催されました。多くの会員・会友が参加して、全ての議案が満場一致で承認され盛況のうち無事終了、又、松田会員の記念講演も感銘深いものでした。

千葉支部だより6月号（第43号）をお届けします。支部だよりは現在、3、6、9、12月に発行しています。支部の会報誌という性格上、新しい年や年度に関連した記事をもっと掲載した方が良いのではとも思います。それならば、1、4、7、10 月発行とした方が良いという話もあります。検討してみようかと思っています。皆さまのご意見は如何でしょうか。

今回から山行参加者氏名の後に（敬称略）は記載しないことといたします。　　（Ｓ．Ｙ生）

山　行　の　予　定

（7 月 1 日以降）

行き先	日　程	申　込　先	締切	備　考
越後駒ヶ岳	7.1（日）～ 7.2（月）	山田紀夫 支部だより参照	締切終了	車 2 台分乗 10 名以内
第 34 回全国支部 懇談会（北海道支部）	7.21（土） ～7.22（日）	三田　博 支部だより参照	締切終了	支部一括申込済
ビールパーティー	8.11（土）	香高真奈美 080-1107-0490	7.31（火）	サッポロビール園 午後 6 時開始
仙丈ケ岳	8.25（土）～ 8.26（日）	山口文嗣 支部だより参照	7.31（火）	馬ノ背ヒュッテ泊 花の 3000m 峰
聖岳－光岳	9.6（木）～ 9.10（月）	山本哲夫 支部だより参照	8.20（月）	4 泊 5 日（山中 3 泊） 健脚向き
唐沢山ハイキング	10.14（日）	杉本正夫 支部だより参照	10.7（日）	集合 東武佐野線堀米駅前 9：50
奥多摩鷹巣山、 六つ石山	10.27（土）	山本哲夫 支部だより参照	10.20 （土）	健脚向き　電車
扇山　百蔵山	11.10（土）	山本哲夫 支部だより参照	11.3（土）	電車
郡界尾根	12.8（土）	山口文嗣 支部だより参照	11 月末	郡界尾根フィナーレ 山行と忘年山行 内浦山県民の森　泊
粟又の滝～小沢又の滝	12.9（日）			
ネパールトレッキング（10 日間）	3 月上旬～ 中旬			14 ページ参照

＊電話での問合せは、支部長三木雄三（みきゆうぞう）宛てにお願いします。　（TEL　090-4393-3515）

印刷　三陽メディア株式会社